

文化 第83巻 第1・2号 一春・夏一 別刷  
令和元年9月28日発行

## 飽和から非飽和への意味拡張とその制約

羅

漢

## 飽和から非飽和への意味拡張とその制約

羅 漢

### 1. はじめに

名詞には、それ自体で意味が完結しているタイプと、「～の」というパラメータを意味的に含んでおり、その値が確定しない限り、外延を決定できないタイプとがある。西山（1990、2003）は、前者を「飽和名詞」（saturated noun）、後者を「非飽和名詞」（unsaturated noun）と呼んだ。そして大多数の名詞は、飽和名詞と非飽和名詞のいずれかであることを述べた上で、「子供」のように「児童」（飽和名詞）にも「（誰かの）息子や娘」（非飽和名詞）にも解釈される多義的な名詞は、量的に限られていることを指摘した（西山 2003、山泉 2013）。しかし、筆者の調査によれば、飽和名詞、非飽和名詞ともに多義的なものが多数存在する。以下、(1) に例を挙げる。

- (1) 武器、舞台、懐刀、試金石、踏み台、モルモット、潤滑油、代名詞、道標、物差し、赤信号、癌、贅肉、骨格、あけぼの、結晶、爪痕、卵など

例えば、(1) の「武器」は「戦いに用いる種々の器具」を指す場合は飽和名詞であるが、「誰かにとっての有力な手段」を表す場合は非飽和名詞であると考えられる。なぜなら、あるものについて、それが戦闘用具であるかどうかを問うことは原理的に可能であるのに対し、ある手段が、ある人にとっては有力であっても、別の人にとっても有力とは限らないからである。(1) のような名詞は、いずれも本来は飽和名詞であるが、比喩的に拡張されて使用されるうちに非飽和名詞の用法（語義）を獲得したのだと思われる。

本稿では、上記の例で示したような、多義的な名詞に着目し、それらが飽和から非飽和へと意味拡張を行われる際に、どのような制約があるのかを明らかにすることを主たる目的とする。また、そのような意味拡張のプロセスでは、

各語についてのどのような知識が関与しているのかも論じる。

本稿の構成は次のとおりである。まず、第2節で非飽和名詞の理論的・操作的定義を紹介し、(1)で挙げた名詞について多義的（飽和名詞と非飽和名詞）であることを確認する。そして、第3節で先行研究の検討を行い、問題を提起する。続く第4節では、多義を構成する意味拡張の基盤をなす3種類の類似性（対象レベルの類似性、関係レベルの類似性、プラグマティックな類似性）を紹介し、非飽和名詞への意味拡張が関係レベルの類似性、もしくはそれとプラグマティックな類似性の両方に基づくことを示す。続く第5節では、飽和名詞から非飽和名詞への意味拡張において、どのような知識が関わっているのかを論じ、第6節でそれらの知識のうち、役割に関する知識が最も高い割合を占める要因を指摘する。最後に、第7節で本稿のまとめと今後の課題について触れる。

## 2. 非飽和名詞の理論的・操作的定義

まず、飽和名詞の「既婚者」と非飽和名詞の「配偶者」を例に挙げ、非飽和名詞とは何かについて説明する。

ある人が既婚者であるかどうかを判断するには、その人の結婚相手を特定する必要はない。どんな人を結婚相手に選んだとしても、その人が結婚さえしていれば、既婚者のカテゴリーに属すると考えられる。このような名詞は、「それ自体で意味が完結しており、ある対象がその名詞の属性を満たすかどうかを自律的に定め」られ、外延決定に関してほかの要素を必要としない点で飽和状態にあると言えるため、飽和名詞と呼ばれる（西山 2012 : 101）。一方、これとは対照的なのが非飽和名詞である。ある人に向けて、「あなたは配偶者ですか」と尋ねたとしても、答えることは難しい。その人が配偶者であるかどうかは、「誰の」という特定の人物、すなわち結婚相手を同定しない限り、定かではないからである。このような名詞は、『Xの』というパラメータの値が定まらないかぎり、それ単独では外延を決めることができず、意味的に充足していない」ため、非飽和名詞と呼ばれる（西山 2003 : 33）。

そして、ある名詞が飽和名詞か非飽和名詞かを判別するには、その語を用いるにあたって確定させておかなければならない部分（パラメータ）があるかどうかを確認する必要がある。それを調べる方法は、従来の研究では幾つか提案されているが、ここでは西川（2013）で紹介された次のようなテストフレームを用いた。

- (2) この N は {誰の／何の／どの～の／…} N ? (西川 2013 : 67)

(2) の N の位置に飽和名詞と非飽和名詞をそれぞれ代入すると、次のように自然な文とそうでない文に明確に分かれる。

(飽和名詞の場合)

- (3) a. このパソコンは誰のパソコンだろう。  
b. この靴は誰の靴だろう。

(非飽和名詞の場合)

- (4) a. ? この恋人は誰の恋人だろう。  
b. ? この原因は何の原因だろう。

(3) と (4) はそれぞれ飽和名詞と非飽和名詞を代入した例である。前者はいずれも自然な文であるのに対し、後者はいずれも不自然である。この違いは名詞の飽和・非飽和に起因するとされる。つまり、N が飽和名詞の場合、それ単独で意味的に完結しており、指示詞によって特定の対象を指した後でも、その外延を求めることは可能である。一方、N が非飽和名詞の場合、その外延が指示詞によって一度決められたら、そのパラメータの値が確定していると思なされるため、疑問詞でそのパラメータの値を再度問うことは不可能になる。

さて、このテストを使って、(1) に示される名詞が飽和と非飽和に関して多義的であることを確かめてみよう。ここでは、そのような多義的な名詞に対して、本来の意味を原義、比喩的に使われる意味を比喩義と呼んで区別する。

(原義の場合)

- (5) a. この武器は誰の武器だろう。  
b. この舞台は何の舞台だろう。

(比喩義の場合)

- (6) a. ? この武器は誰 (にとって) の武器だろう。  
b. ? この舞台はどの小説 (にとって) の舞台だろう。

(5) は原義、(6) は比喩義を代入した例である。すなわち、(5) の「武器」「舞台」は、それぞれ「戦いに用いる種々の器具」「演技などを行うための場所」という意味で使用されるのに対し、(6) のそれらは「誰かにとっての有力な手段」「小説などで設定された時代や状況」という意味で使用される。両者を比較すれば、その適格性の差は明確である。原義が用いられる (5) は全く自然であるのに対し、比喩義が用いられる (6) は不自然であると言えよう。例えば、戦場で所属不明の戦闘用具を発見した場合、(5a) を問題にすることはできるが、説明力を誰かの武器と見なして (6a) を問うことは不自然になる。これは、(5b) (6b) の「舞台」についても同様である。

以上、「武器」「舞台」のような多義語は、原義の場合は飽和名詞であるのに対し、比喩義の場合は非飽和名詞になることがわかる。つまり、これらの語は、本来は飽和名詞であるが、比喩的に拡張されて使用されるうちに、非飽和名詞の語義をも獲得したと考えられるのである。そこで、次節では、この種の意味拡張に関する先行研究を概観した上で、本稿で解決すべき課題を提起する。

### 3. 先行研究とその問題点

冒頭で触れたように、西山 (2003 : 37) は、大部分の名詞は「飽和名詞と非飽和名詞のいずれかに解釈される」が、「子供」と「弁護士」のように「両方の解釈を許す名詞も存在する」と述べている。「子供」は「児童」と解釈すれば飽和名詞であるが、「(誰かの) 息子や娘」と解釈すれば非飽和名詞である。

「弁護士」という語も同様に、「弁護士資格を持っている人」の意味であれば飽和名詞であるが、「誰かの／どこかの専門弁護士」の意味であれば非飽和名詞であるとされる。しかしここで注意すべきは、「子供」と「弁護士」がそれぞれ持っている2つの語義は、単一カテゴリー内の要素同士であって、「武器」などのように、カテゴリーを超える比喩的拡張によって結ばれたものではない、という点である。例えば、「子供」の2つの語義は、「人間」という共通のカテゴリーに属するのに対し、「武器」の2つの語義は、それぞれ「具象物」と「抽象物」という異なったカテゴリーに属する。本稿では、このような異なったカテゴリーに属する多義語を考察の対象とし、「子供」や「弁護士」といったタイプの名詞は考察の対象から除外する。

また、氏家 (2017) は、非飽和名詞の概念的基盤を認知文法の立場から特徴づけ、非飽和名詞の背後にある意味拡張には、名詞の意味のベースが大きく

関わっていると論じている。名詞の意味のベース (base) とは、「その語が喚起する、百科事典的知識と結びついた概念内容」のことである (氏家 2017 : 290)。その概念内容のうち、「概念主体 (概念化者) が特に注目する、際立ちの大きい部分構造」は、プロフィール (profile) と呼ばれる (辻編 2013 : 327)。例えば、身体部位を指す「指」は手の全体をベースとし、その末端の枝分かれした部分をプロファイルする。そして、ベース・プロファイルの区別を使って、原義と比喩義における「武器」を記述すると次のようになるとされる。

「武器」は、まず飽和名詞として「戦いに用いる種々の器具」を表しており、その指示対象が「行為の中でどのような役割を果たすのか」といった知識が言語使用者に共有されている (氏家 2017 : 290)。そして、「武器」のもう 1 つの意味は、比喩的に拡張されたものであり、「誰かにとっての有力な手段」を指す。この比喩的な意味は、「誰か」という部分を補わないと外延の決定ができないため、非飽和名詞である。さらに、この飽和から非飽和への意味拡張は、「行為の中で利用することで、行為者が有利な状況を作り出す」というベースにある知識に動機付けられているとされる (氏家 2017 : 290)。つまり、ある語が飽和から非飽和へと比喩的に拡張された場合、その意味のベースにある役割 (「武器」を例にすれば、行為の中で利用することで行為者が有利な状況を作り出すという役割) に関する知識が大きく関与している、ということである。

ところが、行為の中で果たす役割の知識が言語使用者の間で共有されるにもかかわらず、飽和名詞が比喩義で用いられても、非飽和名詞のようにならないこともある。例えば、「蛍光灯」「風見鶏」「案山子」など人工物を表す語を理解するためには、その対象が行為の中でどのような役割を果たすのかといった知識が重要であろう。しかし、これらの語は比喩的に用いられた場合、いずれも非飽和名詞の語義を有しない。「蛍光灯」が「頭の働きの鈍い者」を、「風見鶏」が「定見を持たず、周囲の状況を眺めて、都合のよい側にばかりつく者」を、「案山子」が「見かけばかりで、地位に相当した働きをしない者」を、それぞれ表しているように、それ自体で意味が完結している飽和名詞なのである。したがって、ある語の意味のベースにある役割の知識が、その語を理解する上で重要でありながらも、その語が比喩的に用いられた場合、常に非飽和名詞として解釈されるとは限らないのである。

さらに、(1) から気づくように、飽和と非飽和の多義語のうち、非飽和への意味拡張が役割以外の知識に基づく場合もある。例えば、「あけぼの」という

語は、本来は「ほのぼのと夜が明けはじめるころ」を指すが、「日本歴史のあけぼの」という比喩表現では、「新しい時代が始まること」を表す。この比喩義は、役割に関する知識に基づくというより、むしろ「あけぼのが一日の中でどの位置を占めるのか」という構成部分とその全体に関する知識を土台にしていると考えられる。なお、「(愛の)結晶」「(台風の)爪痕」「(研究者の)卵」などの表現に見られるように、すべての比喩義が役割の知識に基づいているとは言い難い。したがって、飽和から非飽和への意味拡張には、役割についての知識のほか、どのような知識が関わっているのか、詳しく調べるべきであろう。

#### 4. 類似性に基づく比喩的拡張

前節では、飽和名詞である語が比喩的に使われた場合、常に非飽和名詞の語義を持つわけでないことを見た。本節では、比喩的拡張という概念を詳しく観察することにより、非飽和名詞の背後にある拡張に関する制約を明らかにしていく。

「比喩的拡張」(metaphorical extension)とは、「比喩によって意味のカテゴリーを拡張し、多義を構成する」ことであり、「狭義には英語の metaphorical extension に対応して隠喩を指すが、広義には換喩、提喩も含むもの」とされる(辻編 2013 : 305)。本稿が対象とする多義語における拡張は、狭義の意味で使っている比喩的拡張、すなわち隠喩である。「隠喩」(metaphor)とは、「類似性に基づき、対象を、それが事実として属するカテゴリでなく全く別カテゴリから把握する行為(日本語学会編 2018 : 771)」のことであり、その行為の本質は、「経験的に把握している具体的な概念領域を用いて、抽象的な概念領域について推論・理解すること」である、とされる(辻編 2013 : 58)。例えば、「武器」の2つの語義は、それぞれ具象物と抽象物という2つの概念領域に属しており、前者を用いて後者について推論・理解することが可能である。

ところで、隠喩の基盤をなす類似性(similarity)というのは、「何かと何かが似ている」という認識を意味するが、その認識は必ずしも単一ではないようである。鈴木(1996 : 37)によれば、認知科学の分野では、少なくとも3種類の類似性を区別する必要があるとされる。それを概観する前に、一般的に世界や知識を記述するための用語について言及しておく。まず、「対象」(object)とは、現実世界、または知識の中に存在する事物を指す。例えば、木や猫などの具象物あるいは愛情のような抽象的な概念は対象である。次に「属性」(attribute)とは、対象の性質であり、典型的には大きさ、形状、色などである。この属性



は種や個体ごとに特定の値 (value) を持っている。例えば、海は色という属性について、青という値を持っているという言い方をする。そして、「関係」 (relation) とは、このような対象同士を結びつける役割を持っている。例えば、「太郎が酒を飲む」という文では、太郎という対象と酒という対象が「飲む」という関係によって結ばれていると考えるわけである。この場合、関係によって結び付けられる対象を関係の項あるいは引数 (argument) という。

さて、鈴木 (1996) が指摘する 3 種類の類似性の 1 つ目は、**対象レベルの類似性** (object-level similarity) である。この類似性は、「2 つの対象の間の類似であり、2 つのものの間で特徴がどれだけ共有されているかで決まる」とされる (鈴木 1996 : 37)。例えば、人間の指とバナナの房が似ているが、これは人間の指とバナナの房は黄色かったり、配列や形が比較的近いなど、多くの特徴を共有しているからである。次に、類似性の 2 つ目は、**関係レベルの類似性** (relational similarity) であり、この類似性は「ベース (筆者注 : 原義が属するカテゴリー) に存在する関係とターゲット (筆者注 : 比喩義が属するカテゴリー) のその共有の度合いに基づく」とされる (鈴木 1996 : 38)。例えば、「常識」を「空気」になぞらえた場合では、対象レベルでは殆ど共有されるものはないが、この 2 つの領域においては、「x の位置が高ければ高いほど y が希薄になる」という関係が共有されている。最後に、**プラグマティックな類似性** が挙げられるが、これは「問題の解法、あるいは目標レベルでの類似性」とされる (鈴木 1996 : 38)。例えば、「この問題は前に解いた例の問題 (同じ数式を利用するので) と似ている」という認識は、プラグマティックな類似性に基づく認識である。

では、この 3 種類の類似性は、非飽和名詞への意味拡張とどのように関わっているのだろうか。まず、比喩義が飽和名詞か非飽和名詞かで異なる語のグループを比較されたい。

(7) **比喩義が飽和名詞である語**

根無し草、糸瓜、悪魔、仏、河童、青蝇、蚊蜻蛉、単細胞、鳩胸など

(8) **比喩義が非飽和名詞である語**

武器、舞台、懐刀、試金石、踏み台、モルモット、潤滑油、代名詞、道標、物差し、赤信号、癌、贅肉、骨格、あけぼの、結晶、爪痕、卵など

((1) の再掲)



(7) は、原義と比喩義の両方ともが飽和名詞であるグループである。例えば、(7) の「根無し草／糸瓜」は、本来は「水の上に漂い浮いている草／つる性植物の一種」を指すが、比喩的に用いられた場合は、「確かなよりどころのない生活／取るに足りないもの」を表す。いずれの語義も意味的に充足している飽和名詞である。一方、(8) は、原義は飽和名詞であるが、比喩義は非飽和名詞であるグループである。例えば、(8) の「潤滑油／代名詞」は、原義は「機械の接触部の摩擦を少なくするために用いる油／人物、事物、場所などを指示する機能をもった文法要素」であり、それ自体で意味的に完結する飽和名詞であるが、比喩義は「何かの物事が円滑に運ばれる仲立ちとなるもの／何かのものを典型的に表しているもの」であり、「何か」という部分を補わない限り外延の決定ができない非飽和名詞である。

では、この2グループにおける意味拡張は、それぞれどのような類似性に基づくのだろうか。結論を先取りして言えば、(7) は対象レベルの類似性に基づいており、(8) は関係レベルの類似性に基づくか、もしくは、関係レベルとプラグマティックな類似性の両方に基づいているのである。

まず、(7) のグループについて見ていく。前述のように、「根無し草」は、「水の上に漂い浮いている草（原義）／確かなよりどころのない生活（比喩義）」を、「糸瓜」は、「つる性植物の一種（原義）／取るに足りないもの（比喩義）」をそれぞれ表している。これらの原義と比喩義は、対象レベルの類似性によって結ばれていると考えられる。「根無し草」の2つの語義は「漂い動いて定まらない」という属性を、「糸瓜」のそれらは「つまらなくて役立たない」という属性を共有しているからである。これらの属性は、種や個体ごとに値を有するものの、異なる対象同士を結びつける役割を持たないのである。このことは、対象レベルの類似性と関係レベルの類似性を区別する上での最も重要な点とも言えよう。

(7) の多義性は対象レベルの類似性に基づくのと対照的に、(8) のグループは、専ら関係レベルの類似性とプラグマティックな類似性に基づくのである。例えば、(8) の「武器／舞台」を理解するためには、武器とそれを使う使用者との関係や、舞台とそこで行われる演技（の種目）との関係についての知識が不可欠である。これらの関係についての知識は、「武器／舞台」が比喩的に拡張される際にも受け継がれていると考えられる。「説明力は太郎の武器だ」という文では、武器と使用者の関係がそのまま「説明力」と「太郎」の関係に対

応付けられ、「仙台はこの映画の舞台だ」という文では、舞台とそこで行われる演技の関係が直ちに「仙台」と「この映画」の関係に対応付けられるからである。つまり、「説明力」と「太郎」との関係が「武器」とその背後にいる使用者との関係に、「仙台」と「この映画」との関係が「舞台」とそこで行われる演技との関係に、それぞれ投射されているわけである。したがって、(8)における意味拡張は、異なる対象同士に共有される属性に基づくのではなく、違う概念領域に存在する関係の対応付けを土台にしているのである。

また、(8)の意味拡張がプラグマティックな類似性に基づく場合もあるというのは、次のようなことである。プラグマティックな類似性とは、前述したように、「問題の解法、目標レベルでの類似性」をいう。つまり、2つの概念領域が、同一あるいは類似の、目的およびその目的を実現させる方法を共有している、ということである。(8)の「懐刀」を例に説明すれば、次のようになる。

「懐刀」は、もともと「懷中に所持する護身用の小さい刀」を指すが、比喩的に用いられた場合は、「社長の懐刀」のように、「(誰かの)腹心の部下」を表す。この2つの語義は、「いざという時に自分を守る」という共通の目的と、「懐刀(の指示対象)を利用する」というその目的を達成する方法を共有していると考えられる。

ただしここで注意すべきは、(8)のすべての多義語がプラグマティックな類似性に基づくわけではない、ということである。例えば「爪痕／卵」は、それぞれ「爪でかいた傷跡(原義)／天災などが残した被害(比喩義)」と、「鳥などが産んだ球形のもの(原義)／修行中の人(比喩義)」を表しているが、これらの語義は、類似の目標やそれを達成する方法を共有していないため、プラグマティックな類似性に基づくものとは言えない。目標を実現させるのに、それを目指して行動する主体の理性ないし意志が不可欠であって、天災などが被害を残すことや卵が孵化したり成長することには理性と意志を持つ主体が存在しないからである。

以上述べてきたように、ある飽和名詞が比喩的に用いられた場合、非飽和名詞として解釈されるためには、その原義と比喩義の間に見られる類似性が、対象レベルの類似性ではなく、関係レベルの類似性、もしくは関係レベルの類似性とプラグマティックな類似性の両方でなければならないのである。なお、この制約に則ると、先行研究の問題点として取り上げた「蛍光灯」「風見鶏」「案山子」などの語についても説明できる。例えば、「蛍光灯」の2つの語義(「一

種の照明器具」と「頭の働きの鈍い者」が「反応するのに時間がかかる」という属性しか共有していないため、その意味拡張は対象レベルの類似性に基づくものである。したがって、これらの語が非飽和名詞として解釈されないのは、その原義と比喩義とが関係レベルの類似性によってではなく、対象レベルの類似性によって結び付けられているからであると言える。

## 5. 飽和名詞と非飽和名詞の多義語のタイプ分け

前節では、非飽和名詞の背後にある意味拡張に関わる制約を明らかにした。以下では、その拡張のプロセスにおいて、各語についてのどのような知識が関与しているのかを見ていく。

先行研究では、飽和名詞から非飽和名詞への意味拡張が、名詞の指す対象が行為の中でどのような役割を果たすのかということに関する共有された知識に基づいていると一般化された。ところが、「結晶」「爪痕」「卵」などに見られるように、役割以外の知識に基づく意味拡張もある。そこで、本稿では、比喩表現約 5000 語をジャンルごとに分類配列した『分類 たとえことば表現辞典』および筆者の手元にある新聞や書籍を使って、比喩的拡張による多義語の調査を行った<sup>1</sup>。

その結果、飽和と非飽和の多義的な名詞が 140 語見つかった<sup>2</sup>。そのうち、役割に関する知識（以下、「役割の知識」と呼ぶ）のみに基づいて拡張された語が 98 語、それ以外の知識に基づいて拡張された語が 42 語であった。また、42 語のうち、あるものとそれを構成する部分との関係（材料、材質、内容、～の一部分といった性質）に関する知識（以下、「構成の知識」と呼ぶ）に基づくものが 27 語、あるものとその発生または落着に関する事柄との関係（そのものを生み出す行為や原因、成り立ち、出処、あるいはそのものがたどりつく所、行く先、成長した姿）に関する知識（以下、「変化・発展の知識」と呼ぶ）に基づくものが 15 語であった。調査の結果を表 1 にまとめる。

<sup>1</sup>原義と比喩義の両方ともが飽和名詞の場合も併せて調べた（別表 1 を参照）。その結果、得られた 74 語がすべて対象レベルの類似性に基づくものであることを確認している。

<sup>2</sup>飽和名詞と非飽和名詞の多義語を選定するにあたって、(2) のテストフレームを利用した。

表 1 飽和と非飽和の多義語のタイプ分け

役割の知識 (98 語) 70%	赤信号 <sup>(-)3</sup> 、足かせ <sup>(-)</sup> 、障壁 <sup>(-)</sup> 、墓場 <sup>(-)</sup> 、汚点 <sup>(-)</sup> 、致命傷 <sup>(-)</sup> 、不協和音 <sup>(-)</sup> 、青信号、座標軸、引き金、導火線、起爆剤、口火、誘い水、呼び水、嚆矢、受け皿、階段、道、鍵、架け橋、糧、金箱、ドル箱、看板、腰巾着、差し金、試金石、決まり手、四十八手、潤滑油、捨て石、爪牙、代名詞、助け舟、盾、紐帯、蝶番、接ぎ穂、道具立て、狼煙、柱、火元、舞台、懐刀、踏み台、宝庫、防波堤、道標、妙薬、用心棒、坩堝、記念碑、犬、武器、鏡、指針、足がかり、歯車、物差し、実験台、方程式、鋳型、駒、青写真、綾、操り人形、傀儡、椅子、餌食、大掃除、絆、橋頭堡、切り札、金字塔、食べ物、潮時、洗礼、宝、玉手箱 <sup>みとづしやう</sup> 、宝石箱、知恵袋、手品、天国、奴隷、縄張り、明星、亡者、分かれ道、リトマス試験紙、レシピ、スパイス、アクセント、パール、モルモット、ダークホース、黒船 <sup>(固)4</sup> 、メッカ <sup>(固)</sup>
構成の知識 (27 語) 19.3%	癌 <sup>(-)</sup> 、贅肉 <sup>(-)</sup> 、アキレス腱 <sup>(-)</sup> 、礎、骨、骨格、骨組み、餡子、あけぼの、暁、曙光、大綱、眼目、瀬戸際、醍醐味、潮流、渦巻き、辻褄、横綱、尻尾、心臓、オアシス 洪水 <sup>(-)</sup> 、淵 <sup>(-)</sup> 、林、いろは、ABC
変化・発展の知識 (15 語) 10.7%	芽、卵、泉、揺籃 落とし子、垢、足跡、爪痕、抜け殻、脱皮、置き土産、化石、結晶、権化、二番煎じ

表 1 から明らかなように、飽和と非飽和の多義語のうち、「役割の知識」のみに基づくものが最も多く、全体の 70% を占めている。続いて「構成の知識」に基づくものが 19.3%、「変化・発展の知識」が 10.7% となった。また、「構成の知識」に分類されたもののうち、「洪水」「淵」「林」「いろは」「ABC」を除いて、すべての語が「役割の知識」にも基づいている。例えば、「癌」という語は、本来は「生体にできる悪性腫瘍」を指すが、比喩的に使われる際に、「官僚政治の癌」のように、「組織の内部にある大きな障害」を表す。その原

<sup>3</sup> 右肩に (－) が付いた語は、通常の役割ではなく、マイナス的な役割、すなわち妨げを表すものである。例えば、「高血圧は健康の赤信号だ」という文では、「赤信号」の指示対象である「高血圧」が「健康」の妨げになっているのである。

<sup>4</sup> 右肩に (固) が付いた語は、固有名詞である。別表 1 に関しても同様である。

義から比喻義への拡張は、構成部分とそれを含めた全体に関する知識だけでなく、「それを患って放置されれば、死に至る」というマイナス的な役割（妨げ）に関する知識にも基づくのである。このような語も併せて集計すると、「役割の知識」に基づいて拡張された語は、全体の 85.7% をも占めることになる<sup>5</sup>。

そして、変化・発展の知識に基づいて拡張された多義語は、「芽」「卵」「泉」「摇篮」に代表されるように、あるものとそのものの行く先や成長した姿との関係を表すグループと、「落とし子」「垢」「足跡」「爪痕」などのように、あるものとそのものを生み出す行為や原因との関係を表すグループに分けられる。例えば、前者の「芽」「卵」は、いずれも植物や動物が成長し始める最初の段階を表すのに対し、後者の「落とし子」「垢」は、いずれも人間などの主体が元になって、そこから生まれたものを表す。

以上、飽和名詞と非飽和名詞の多義語の意味拡張において、役割の知識、構成の知識および変化・発展の知識という 3 種類の知識が関与していることを見てきた。次節では、最も出現割合が高かった役割の知識について、さらなる検討を加えていくことにする。

## 6. 役割の知識とシステム性原理

第 4 節では、飽和から非飽和への意味拡張が関係レベルの類似性に基づかなければならないことを確認した。ところで、関係にもさまざまな種類が考えられる。例えば、Gentner (1983) が提案する構造写像理論 (structure mapping theory) では、次のような区別を重視する。1 つは関係がとる項の数 (arity) であり、もう 1 つは関係の次数 (order) である。本稿にとって特に重要となるのは、後者の概念である<sup>6</sup>。後者については、さらに対象を項としてとる場合と、ほかの関係を項としてとる場合を区別する。前者は**一次 (first-order) の関係**と呼ばれ、後者は**高次 (higher-order) の関係**と呼ばれる。例えば、「太郎が酒を飲む」という事態は「飲む」という一次の関係で表現されるのに対し、「太郎が酒を飲んだため、よく眠れた」という事態は、原因と結果という

<sup>5</sup> その理由については第 6 節で述べる。

<sup>6</sup> 前者については、例えば、「利用する」という関係は少なくとも「誰が」と「何を」という 2 つの項をとるが、「あげる」や「教える」などは「誰か」「何を」「誰に」など少なくとも 3 つの項をとると考えられる。

二つの一次の関係を項としてとる「引き起こす」という高次の関係によって表現される。

そして構造写像理論では、高次の関係が2領域間の対応付けで果たす役割が強調されている。つまり、比喩的拡張では、2領域間において、高次の関係が優先的に対応付けられ、また一次の関係の中でも高次の関係の引数であるものが対応付けられる、ということである。Gentner (1983) は、このことを**システム性原理 (systematicity principle)**と呼んでいる。

では、役割の知識、構成の知識、変化・発展の知識という3種類の知識のうち、どの知識に基づく意味拡張がこのシステム性原理を充足させるのであろうか。結論から言えば、それは役割の知識に基づく意味拡張である。構成の知識と変化・発展の知識に基づく意味拡張は、2つの対象を項としてとる一次の関係を基盤にしているのに対し、役割の知識に基づくそれは、2つの命題（一次の関係を項としてとる高次の関係を基盤にしているからである。例えば、役割の知識を利用した「武器」という語について、次のように分析できる。まず、「使用者が武器を使用する」という事態は、「使用する」という一次の関係で表現される。次に、「使用者が武器を使用することにより、有利な状況を作り出す」という事態は、「使用者が武器を使用する」という原因と「有利な状況を作り出す」という結果との二つの命題を項としてとる「引き起こす」という高次の関係によって表現される。ここで、参照しやすいように命題に名前を付けることにし、「武器」の背後にある役割の知識を以下のように示す。

(9) 使用する（使用者、武器）…使用する－1

作り出す（使用者、有利な状況）…作り出す－1

引き起こす（使用する－1、作り出す－1）…引き起こす－1

このように、「武器」という語に関しては、因果関係によって3つの対象（使用者、武器、有利な状況）が結びつけられているのである。また、役割の知識に基づいて拡張されたほかの語についても同様に分析できる。これらの語は、比喩的に用いられた場合、意味のベースにある高次の関係が優先的に対応付けられる。すなわち、役割の知識が高次の関係を基盤にしているものであり、システム性原理を満たすがゆえに、最も高い出現割合となったのだと考えられる。



## 7. まとめと今後の課題

本稿では、飽和と非飽和の多義的な名詞を対象とし、それらが飽和名詞から非飽和名詞へと意味拡張が起こる際に、どのような制約が存在するのかを考察した。その結果は以下のようにまとめられる。

- ① 非飽和名詞の背後にある意味拡張は、対象レベルの類似性に基づくのではなく、関係レベルの類似性、もしくはそれとプラグマティックな類似性との両方に基づかなければならない。
- ② 飽和と非飽和の多義語の意味拡張には、各語の意味のベースにある役割の知識、構成の知識および変化・発展の知識が大きく関与している。
- ③ 役割の知識に基づいて拡張された多義語が最も多いのは、それらの名詞が意味の拡張をする際に、システム性原理を満たしているからである。

一方で、残された課題も多い。本稿では、役割の知識に基づく意味拡張が最も高い割合を占めるのは、その拡張がシステム性原理を充足させるからであると論じたが、なぜシステム性原理を満たせば、名詞の意味拡張が起こりやすいのかについては踏み込めていない。また、井門（2017）などが取り上げた「買い物難民」「ネットカフェ難民」のような「～難民」や、「戦争ポルノ」「フードポルノ」「愛国ポルノ」のような「～ポルノ」といった新造語・複合語についても関係レベルの類似性に基づく意味拡張によって説明できるのか、という点についても触れることができなかった。いずれも今後の課題としたい。

## 参考文献

- 井門亮（2017）「第5章 多義語の分析と語用論」中野弘三（編）『語はなぜ多義になるのかーコンテクストの作用を考えるー』朝倉書店
- 氏家啓吾（2017）「「地図をたよりに」構文と非飽和名詞」『東京大学言語学論集』38、287-301
- 鈴木宏昭（1996）『類似と思考』共立出版
- 辻幸夫編（2013）『新編 認知言語学キーワード事典』研究社
- 中村明（2014）『分類 たとえことば表現辞典』東京堂出版
- 西川賢哉（2013）「「NP<sub>1</sub>のNP<sub>2</sub>」タイプF—譲渡不可能名詞NP<sub>2</sub>とその基体表現NP<sub>1</sub>」  
西山佑司（編）『名詞句の世界 その意味と解釈の神秘に迫る』ひつじ書房、65-82



- 西山佑司（1990）「「カキ料理は広島が本場だ」構文について―飽和名詞句と非飽和名詞句―」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』22、169-188
- 西山佑司（2003）『日本語名詞句の意味論と語用論―指示的名詞句と非指示的名詞句―』ひつじ書房
- 西山佑司（2012）「第4章 語や句の曖昧性はどこからくるか」今井邦彦・西山佑司（2012）『ことばの意味とはなんだろう』岩波書店、89-143
- 日本語学会編（2018）『日本語学大辞典』東京堂出版
- 山泉実（2013）「非飽和名詞とそのパラメータの値」西山佑司（編）『名詞句の世界 その意味と解釈の神秘に迫る』ひつじ書房、11-27
- Gentner, D. (1983) Structure mapping: A theoretical framework for analogy. *Cognitive Science*, 7. 155-170

別表1 原義と比喻義の両方ともが飽和名詞である多義語

超自然的な物	仏、河童、麒麟、臥竜、蛟竜、吸血鬼、悪魔、仙人、天使
物理的な物や事	石仏、金仏、案山子、風見鶏、飾り物、金槌、蒲鉾、喜劇、金箔、蛍光灯、雑音、神話、成長株、禅問答、高嶺の花、単細胞、茶番劇、低気圧、栃麺棒、止まり木、泥沼、成金、人形、寝技、昼行灯、袋小路、ままごと、満艦飾、水の泡、桃源郷 <sup>(国)</sup> 、バベルの塔 <sup>(国)</sup>
植物	古い木、根無し草、糸瓜
動物	毛虫、裸虫、青蝇、蚊蜻蛉、猫舌、狼、虎狼、豺狼、狸、狐、古狐、種馬、獣、禽獣、鼈、雑魚、蝙蝠、鳩胸、ひよこ、鳥、旅鳥、掠鳥、渡り鳥
人間	赤ん坊、乳臭児、原始人、豪傑、侏儒、政治家、太公望 <sup>(国)</sup>

## Semantic Extension from Saturation to Unsaturation and its Constraints

Han LUO

There are two types of nouns in Japanese: one is called ‘saturated nouns’, which are complete by themselves and whose extensions are determined autonomously, and the other one is called ‘unsaturated nouns’, whose extensions cannot be determined unless their parameters *nanno* ‘of what’ are decided. It was generally considered that the majority of nouns are either saturated nouns or unsaturated nouns and few of them are interpreted as both saturated and unsaturated nouns (e.g. *kodomo* ‘child’ is interpreted as ‘a human being who is not yet an adult’ as a saturated noun and ‘someone’s son and daughter of any age’ as an unsaturated noun).

The date-based research I have conducted, however, shows that ambiguous nouns that can be both saturated and unsaturated can be occasionally found in the process of the semantic extensions called metaphorical extension. This paper proposes that such kind of semantic extensions are based on relational similarity and pragmatic similarity, and in the process of that the encyclopedic knowledge of each word on the telic, constitutional and agentive aspects respectively are heavily involved. Moreover, as the extensions based on the knowledge on the telic aspect satisfy the systematicity principle, those extensions account for the highest proportion of all extensions.

Keywords: metaphorical extension, relational similarity, encyclopedic knowledge